

東シナ海開戦2

戦狼外交

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

プロローグ	11
第一章 シージャック	18
第二章 船医	40
第三章 特殊部隊	67
第四章 診療所	99
第五章 脱走者	125
第六章 グローバル・アラート	149
第七章 カシユガル	174
第八章 キスカ	200
エピローグ	219

登場人物紹介

日本

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 陸将補。水陸機動団長。出世したが、元上司と同僚の行動に振り回されている。

〔原田小隊〕

はらたたくみ
原田拓海 一尉。陸海空三部隊を渡り歩き、土門に一本釣りされ入隊した。今回、記憶が無いまま結婚していた。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕としての活躍。コードネーム：キャッスル。

まさだ はるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあやか
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目をつけられ、日本人と結婚したことで部隊にひっぱられた。

うるしげらたけとみ
漆原武富 曹長。司馬小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。分隊長。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

い い かける
井伊翔 一曹。高専出身で部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

みずの ともお
水野智雄 一曹。元体育学校出身のオリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

にしかわしんすけ
西川新介 二曹。種子島出身で、もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

み どう そう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこう じ きわあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の巨頭。コードネーム：ボーンズ。

かわにしまさみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ
由良慎司 三曹。西部普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしょう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あまひひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメデイック。生徒隊時代の原田の同期。訓練小隊を率いる。コードネーム：フアラライ。

〔民間軍事会社〕

おとなしせいじ
音無誠次 土門の元上司。自衛隊退役者からなる民間軍事会社の顧問。〆ヘブン・オン・アース。内に滞在していた。

〔西部方面普通科連隊〕

し び ひかる
司馬光 一佐。水陸機動団教官。引き取って育てた娘に店をもたせるため、台湾にいたが……。

〈海上自衛隊〉

さきまさあき
佐伯昌明 元海上幕僚長。太平洋相互協力信頼醸成措置会議の、日本側代表団を率いる。

かわはた ゆ たか
河畑由孝 海将補。第一航空群司令。

しもぎのしげ き
下園茂喜 一佐。首席幕僚。

い せ ぎまたもつ
伊勢崎将 一佐。第一航空隊司令。

（第一潜水隊群）

ながもりともゆき
永守智之 一佐。第一潜水隊群司令。

うぶかたて お
生方盾雄 二佐。〆おうりゅう、艦長。

しんどうあら た
新藤荒太 三佐。〆おうりゅう、副長兼航海長。

むらにしこう じ
村西浩治 曹長。航海科。作戦の全般を監督する。原田拓海とは同期で、生徒隊繋がり。

〈外務省〉

九条 寛 くじょうひろし 外務省・総合外交政策局・安全保障政策課係長。`ヘブン・オン・アース`日本側の事務方トップ。

〔豪華客船 `ヘブン・オン・アース、〕

マッティオ・カッサーニ 船長。イタリア人。

ガリーナ・カサロヴァ `ヘブン・オン・アース、`の船医。五ヶ国語を喋るブルガリア人女性。

五藤 彬 ごとうあきら `ヘブン・オン・アース、`の船医。感染症学が専門の研究者。

是枝 飛雄馬 これえだひゅうま プロオケを目指していた青年。プロオケの先輩から誘われ、`ヘブン・オン・アース、`に乗り込んだ。

浪川 恵美子 なみかわ えみこ 是枝が思いを寄せるピオラ奏者。音楽教師を三年で辞めて、奏者に復帰した。

ハリムラット・アユップ `ヘブン・オン・アース、`の中庭のワゴンでケバブを売っていた男。

//// アメリカ //////////////////////////////////////

〈陸軍〉

マーカス・グッドウィン 中佐。グリーンベレーのオブザーバー。

〈海軍〉

クリストファー・バード 元海軍少将。太平洋相互協力信頼醸成措置会議のアメリカ側代表団。佐伯昌明元海上幕僚長のカウンターパート。

〈海兵隊〉

ジョージ・オブライエン 中佐。海兵隊オブザーバー。

（ネイビーシールズ）

カイル・コートニー 曹長。チーム1のベテラン。

エンリケ・リマ 大尉。部隊の指揮をとる。

//// 中国 //////////////////////////////////////

〈海軍〉

（総参謀部）

任思遠 レン スイユアン 海軍少将。人民解放軍総参謀部作戦部特殊作戦局局長兼特

殊戦司令官。四一四突撃隊を立ち上げた。

ホアントン
黄桐 大佐。局次長。

(四一四突撃隊)

コンウェイホン
公衛紅 海軍大佐。突撃隊隊長。

トワイチ
鄧一智 中尉。副官。

タオカンチアン
陶剛強 中佐。襲撃部隊副隊長。

モオユウキン
莫裕堅 少佐。機関室襲撃のリーダー。

シュイヤン
徐陽 曹長。

(`蛟竜突撃隊)

シュイスン
徐孫童 中佐。`蛟竜突撃隊、を指揮する。

トンシアオニン
東曉寧 海軍大将（上将）。南海艦隊司令官。

ホワイチ
賀一智 海軍少将。艦隊参謀長。

(K J - 600 (空警 - 600))

ハオフェイ
浩菲 中佐。空警 - 600 のシステムを開発。電子工学の博士号を持つエンジニア。

イエフワン
葉凡 海軍少佐。空警 - 600 機長。搭乗員六人のうちの唯一の男性。

チンイー
秦怡 大尉。副操縦士。上海の名門工科大学、同済大学の浩菲の後輩。電子工学の修士号をもつ。

カオシユエビン
高学兵 中尉。機付き長。浩が関わるずっと前から機体開発に関わっていたベテランエンジニア。

(第 164 海軍陸戦兵旅団)

ヤオイエン
姚彦 少将。第 164 海軍陸戦兵旅団を率いる。

ワンヤントン
万仰東 大佐。旅団参謀長。

レイイエン
雷炎 大佐。旅団作戦参謀。中佐、兵站指揮官だったが、姚彦が大佐に任命して作戦参謀とした。兵士としては無能だが、作戦を立てさせると有能。

タイイーチ
戴一智 少佐。旅団情報参謀。情報担当士官だったが、上官が重体になり旅団情報参謀に任命された。

(台湾)

ライシャオチセオ ロンユン
頼筱喬 サクラ連隊を率いて戦死した頼龍雲陸軍中将の一人娘。台

北で新規オープンした飲茶屋の店主。司馬光が「チャオ」と呼び、店の開店を支援している。

ワンチーハオ
王志豪 退役海軍中将。海兵隊の元司令官で、未だに強い影響力をもつ。王文雄の遠縁。

ワンウェンション
王文雄 司馬の知り合いで、司馬は「フミオ」と呼ぶ。京都大学法
学部、大学院に進み、国民党の党職員になった。今は、台日親
善協会の幹部候補生兼党の対外宣伝部次長。

〈台湾軍海兵隊〉

〔第99旅団〕

チェンヂーウェイ
陳智偉 大佐。台湾軍海兵隊第99旅団の一個大隊を指揮する。

ホァンジュンナン
黃俊男 中佐。作戦参謀。大隊副隊長でもある。

ウージンフー
呉金福 少佐。情報参謀。

ヤンヂーミン
楊志明 二等兵。美大を休学して軍に入った。

〈空軍〉

リーイェン
李彦 空軍少将。第5戦術戦闘航空団を指揮する。

リウジェンホン
劉建宏 空軍中佐。第17飛行中隊を率いる。

///シンガポール///

〈インターポール・反テロ調整室〉

シユウエンロン
許文龍 警視正。RTCN代表統括官。

メアリー・キスリング RTCNの次長。FBIから派遣された黒人
女性。

しばたゆきお
柴田幸男 警視正。警察庁から派遣されている。

パクボムホ
朴机浩 警視。韓国警察から派遣されている。

///イギリス///

〈英国対外秘密情報部 (MI6)〉

マリア・ジョンソン MI6極東統括官。大君主。オーバーロード

東シナ海開戦2 戦狼外交

プロローグ

その豪華客船のブリッジは、海面から六〇メートルの高さにあった。ビルでいえば二〇階立てに相当する。

だがブリッジは船の最上階ではなく、そこにはルーフガーデン付きの特別室があった。

部屋に名前は無い。乗客たちにも、その存在は知られていなかった。勿論船内の見取り図にも載っておらず、知っているのはサービスを担当するホテル部門の上級スタッフのみだ。

彼らはこの部屋のことを「RS」と通称で呼んでいた。「ロイヤル・スプリーム」の略だ。

「RS」のルーフガーデンにあるジャグジーは、

三六〇度の大海原を見渡せる。ベッドルームからも、船の前方はもとより左右も見渡せた。部屋を移れば、デッキ越しに船尾側の眺望も得られる。

値段は、あえて言えば時価だ。最低価格だけはあつて、一泊一万ドル。あとは専門の給仕を何人付けるか、旅の日数での相談ということになる。

秘書や給仕用の狭く窓の無い部屋が、階下デッキのブリッジの後ろに設けられてもいる。

ハリーフア&ハイガー・カンパニーのCEOであるナジブ・ハリーフアは、鏡を覗き込みながら髭を整え、ネクタイを絞めた後でロンドンで仕立てた背広を羽織った。

何事も、演出は大切だ。人生も、投資も、演出が大事なのだ——。これは、今は亡き父の口癖であった。

この仕事が終わった時、もし自分が生きていたら髭は剃ると決めていた。身なりでアラブ人をアピールすることには、うんざりしていた。

われわれは行動によってのみ、その誇りを保つべきなのだ。

ハリーフアは化粧室にある一〇インチのモニターを操作し、階下のブリッジの様子を表示させた。ブリッジの監視カメラ映像は、特別にこの部屋でだけ常時見られるようになっていたのだ。

ブリッジの合計四箇所を設置されたカメラの映像が、自動的に切り替わっていく。兵はすでに配置についていた。ブリッジを制圧した兵士の人数を見る限り、飛びかかって反撃しようという物好きはいないだろう。

ブリッジ内で動く人間は全くなかった。全員が凍りついたかのようにその場で立ち尽くしていた。監視カメラがブリッジ正面、コンパスの真上のワイドレンズに切り替わると、ブリッジ背後に並んだ兵士たちの姿が映った。

全員、すでにアサルト・ライフルは下ろしており、目につくのは航海担当の元海軍兵がクルーから機器の説明を受けながら動いているだけだ。

戦闘ではなく、操船や機関関係の知識で雇われた元海軍兵も何人か加わっている。皆ベテランの傭兵だが、船の周囲を監視する役割の者は少し緊張しているはずだ。

モニターのリモコンを操作し船外カメラに切り替えると、マストに装備されたカメラの様子が映った。この映像は、どの客室でも見られるはずだ。巨大な船体を両側から挟み込むかのように、様々な公船が迫ってくる。まだほんの四、五隻で、

タグボートに毛が生えた程度の小型船ばかりだが、じきに大型の海警艦や軍艦も姿を見せるだろう。とはいっても、この一〇万トンを超える巨大な客船相手にぶつかって、無事で済むサイズの軍艦はどこにも存在しない。

いや、辛うじてアメリカの空母ならいい勝負ができるかもしれないが、高価な空母をぶつけてまでこの客船を止める合理性は無い。

ハリーファは化粧室の隣、階段横に据え付けられたエレベータで、ブリッジの後部に設けられた乗組員休憩室へと降りた。この客船の最上級ゲストルームに宿泊する者は、好きな時にブリッジを訪問していいことになっている。このエレベータは給仕にも使われるが、基本はこのためにあるのだ。

普段ゲストは赤絨毯あかじゅうたんが敷き詰められた専用の螺旋階段らせんを使い、下のデッキへ降りた。

ハリーファがこのエレベータを使うのは初めてだ。扉が開くと、腰のピストル・ホルスターに手を宛そがった兵士が警戒していた。

視線で合図してからブリッジへと足を踏み入れる。ドアやハッチはない。ブリッジは、ただ分厚い二重のカーテンで隔てられているだけだ。夜は閉められるが、今は明るいためその必要は無い。

船長席には、海軍出身のベテランの曹長が座っていた。後部デッキに繋がるウォークーキーキーで話している。

呼びかけてくる無線機の音声ふくせうが拡声器から輻射ふくせうしていた。「止まれ！ 港に戻れ！」と英語や北京語で喚こゑいているようだ。

「インドラ中佐、問題は？」
「作戦通りです。ミスター」

ブリッジ背後、まさにそのカーテンの近くに立っていた襲撃隊長のクリス・インドラ中佐が軽く

敬礼しながら答えた。隣には、やや距離を置いてイタリア人のマッティオ・カッサーニ船長が立っている。ハリーファが現れると、驚いた表情を示した。

「申し訳無い、船長。お茶でも飲みながら、後ろでお話したいのだが」

「本船は今、中国の公船に包囲されて危険な状況にある。船長として、ブリッジを離れるわけにはいかない」

ハリーファは窓の外に視線を向けた。大河はまるで洪水の後のように薄茶色に濁っている。だが、これが揚子江下流域の日常だ。

「酷く濁った水面だ。心を陰気にさせる。この船は安全だ。彼らは皆船乗りとして訓練を受けているし、回避が必要になった場合、われわれは操縦の邪魔をしない。話は五分で終わる」

「いいだろう」と、船長は一等航海士に「後を任

せる」と告げると率先して後ろへ向かった。

「いつも陽気な船長に、こういう負担をかけることになって申し訳無い。まずはそれをお詫びする」

「あなたの名刺には、ソルボンヌの修士学位取得とあったが、インテリではなかったのか？」

ハリーファはソファに座るよう促したが、船長は結構だと断った。

「インテリにも、武器を取るしかない瞬間はある。さて、われわれは金銭が目的ではない。ある大義のために行動を起こしたが、それは追々話すことになるだろう。船には、数十名の兵士が乗員乗客として乗っている。彼らは全員英語を話し、良く訓練され、実戦経験も豊富で、プレッシャーにも慣れている。だから不測の事態が起こることはほとんどない。つまり乗客を脅すとか、女性乗組員をレイプすることなど無い。ただ、万一のことも

あるので、乗客にはしばらく部屋に留まるよう命じてほしい。乗員も船内を動き回らないように伝えてくれ。食事はきちんと提供させる。この船の水や食料の備蓄量は正確に把握しているつもりだ。目的地は、ひとまずは中国沿岸部から離れることが先決だろうな」

「中国政府はそんなことは許さないぞ。中国の領海内で発生したテロなら、彼らは特殊部隊を乗り込ませて鎮圧する」

「わかっている。その事態にも対応できる作戦を練っているからな。船内で派手な銃撃戦を繰り広げるような事態にはならない。……二つのことを船長に求めたい。まず停船を求める中国の役所に對して自分が指揮権を失ったこと、この船には特殊部隊による制圧作戦に対応できるコマンドと武器があることを無線で警告してほしい。聞かないだろうが、一応警告したという事実は残しておく

たい。また、乗員乗客への警告もお願いしたい。

この船が乗っ取られたことを知らせてほしい」

「君たちのことは、何と呼べばいい」

「テロリスト」でかまわない。この兵士たちはプロだ。血の気が多いだけを取り柄の、そこらにいるテロリストではないから、そんなことは気にしないさ」

「あなたは巨万の富を運用する投資家で、社交術も身につけている。いったい何が不満でこのようなことを？」

「他人の自由を奪っておいてこういうことを言っても信じてもらえないだろうが、私はもう十分儲けたし、寄付もしてきた。武器を売り、学校や病院を建てた。最後に、大義のために戦いたいと思つた。ただそれだけのことだよ。……厳しい数日になるだろう。だが乗組員や乗客たちに、けが人や、ましてや死者などは出したくない。そのため

にできる譲歩はする。協力してもらえると助かるよ」

船長は「理解できない」と首を振った。

「それともう一つ。一番大事なこともかもしれないから船医に伝えてほしい。いや、命じてくれ。くれぐれも感染症の蔓延まんえんには気をつけるようにと。コロナ騒動の二の舞はご免だ。乗客の多くが高齢者だ。われわれの作戦が原因で感染症が蔓延し、治療が遅れて死者が出たという事態は避けたい」

船長はこの警告を素直に受け取ったように頷いた。

ハリリーファとしては、船長が自分のこの言葉を信じ、真剣に対応してくれることを願わずにはいられなかった。

感染症が蔓延し、いったん感染者が増えはじめたらコントロールなどできなくなる。

船内での感染者数をどの程度コントロールでき

るかがこの作戦の一つの鍵かぎだが、それは誰にもわからなかった。

ホンコン香港の民主主義を腕力で黙らせた中国は、引き続き戦狼外交を展開した。

周辺各国を揺さぶり、恫喝どうかつし、九段線の完全制圧を目論もくろんで次の行動を起こした。

それが台湾と香港の中間に位置する南シナ海、東沙諸島の東沙島への奇襲上陸だ。

結果、これらを占領し、台湾軍は空からの反撃を試みたが失敗。その報復として、尖閣沖せんかくに集結していた中国海警艦部隊を攻撃し、五隻もの公船を沈めていた。

中国海軍は、救難活動を名目に総力をあげて尖閣へ向かっていたが、警戒にあたっていた海上自衛隊の哨戒機一機を撃墜し、日本の緊張も高まっ

た。

一方で、東アジアの緊張緩和を探る目的で各国の退役将官や外交団を乗せて航海中だった豪華客船「ヘブン・オン・アース」(二三〇〇〇トン)に、バイオテロを企むウイグル人科学者が乗船していることが判明した。上海シャンハイに寄港直前に発覚したのだが、作戦が露呈ろていしたことを悟さとった船内のテログループがただちに決起し、船を乗っ取った。この危機は、まだはじまったばかりだった。

第一章 シージャック

豪華客船「ヘブン・オン・アース」のブリッジから七〇メートルほど後方のロイヤル・クラスの左舷側ルームに、日本の代表団が陣取っていた。

そこは船上で開かれている太平洋相互協力信頼醸成措置会議^Pの日本側代表団を率いる佐伯昌明元海上幕僚長の居室だったが、何しろ広く、カラオケ・ルームを兼ねる会議室が付いていたため、東沙の紛争が起こってから日本代表団はこの部屋に集まっていたのだ。

船は紛争発生直前に香港を発ち、次の寄港地である上海へと向かっていた。ここには、ロシアや中国の代表団も乗船している。

CICPOは東アジア、太平洋地域の緊張緩和を目的として作られた。中国系アメリカ人のシェリル・チェン、ジョージタウン大学教授の発案によるもので、彼女は国務省に強い影響力をもっている。北京語も話す彼女は、中国の要人にも知り合いが多い。

また同時に、コロナ禍で冷え込んだクルーズ船業界のテコ入れも兼ねていて、資金の大部分は日本政府が出した。従って、もつとも多い代表団を送り込んだのはアメリカ、日本、また会議での防戦を義務づけられた中国代表団だった。

佐伯海将と一緒に陸自OBとして乗り込んだ音^{おと}

無誠なせいじ次元一佐は、バルコニーに出ると遠ざかっていく上海の街並みを眺めていた。

揚子江の河口に、この船を追って中国の公船が集まってくる。

最初はタグボートに毛が生えたような大きさの船ばかりだったが、客船が速度を上げはじめるとウォータージェット推進の高速警備艇も出てきた。赤や青の警告ランプを回転させながら「停船せよ！」とスピーカーで怒鳴っている。露天甲板に設置された電光掲示板も「ワレフオロミに続け！」という点滅表示を繰り返していた。

具体的に何が起こったのかはわからないが、異常事態が発生したことだけは確かだ。

棧橋もやに近づき舳もやいを投げた後もパトカーが走り回り、「接岸するな」と警告が発せられた。そのため船は静かに護岸から離れた。

そして間髪いれずに公船が出てくると、今度は

停船命令だ。音無は、接岸は許可しないが停まれというはどういうことだと思った。その謎は、シンガポールからかかってきた一本の電話で氷解した。

外務省の連中も含め誰も知らないようだが、音無だけはそれがシンガポールに設置されたインターポール・反テロ調整室R^TC^Nからの緊急連絡だとすぐにわかった。

この電話では、北京が指名手配をかけているウイグル人科学者が、仲間とともに乗組員としてそこに乗船しておりバイオテロを企んでいる可能性が高い。だから船の接岸を阻止させたという内容だった。

警視庁派遣の警視正を名乗った人物は、自分は誰相手に状況説明すべきかをすぐ悟った様子だった。RTCNの存在に気づくのは、情報筋の人間に他ならない。なので、もっぱら音無が喋った。

音無は会議室に戻り、詳細を外務省の役人宛にメールしてくれと警視正に頼みつつ、いつ回線が切れるともしれないので必要なことだけをメモした。

外交官は衛星携帯を携帯しているようだが、情報漏れを嫌がる中国が妨害をかけてくる可能性があった。

「船会社の呼びかけにブリッジが応答しないとのことですから、シージャックされたのは間違いないでしょう」

電話口の柴田幸男警視正がそう言い切った。

「自分の経験上、この規模の船を制圧するには、数人の素人集団などでは無理だ。ブリッジに機関室、外からの攻撃に備えてデッキにも監視を配置しなきゃならん。最低でも二〇名は必要だ。理想的には三〇名ほどはほしい。テロリストはもっているはずだ。乗組員として潜入していたというこ

とは、かなり前から計画されていたということだ。となると、上海でウイルスをばらまく一方で、Bプランとしてのシージャックも用意していたわけで、極めて高度に練られた作戦だ。狂信的テロリストによる犯行とは、全くの別物だな。少なくとも故郷の人権弾圧に抗議して……というレベルの話ではない」

「はい。シージャックされたなら別働隊がいたということ、ひよつとしたらその別働隊の方が本命で、バイオテロはそれを偽装するために撒かれた時間稼ぎのための疑似餌の可能性があると考えています。犯人グループはわざと露出し、われわれに後を追わせた」

「詳細はわからないが、その可能性はあるだろうな」

その時、部屋のスピーカーが鳴った。

「船長のアナウンスがはじまるようだ。一緒に聞

いてくれ」

英語による船長の声明は短く、あとは北京語の放送があっただけだった。

曰く、テロリスト集団によりこの船は乗っ取られた。彼らの目的は不明である。自分は船長として乗組員と乗客の安全に最善を尽くす。乗組員を含め、しばらくは自分の部屋から出ないように。そう要請していた。「ステイ・ユア・ルーム」と、三度ゆっくりと繰り返すほどだった。

「パイオテロの件には触れていないから、まだ知らないという可能性はあるだろう。一応、こちらでできることはするが——」

そこで回線が切れた。おそらく乗客がSNSに第一報を上げる程度の猶予は与えるつもりなのだ。

「さて、状況を検討しなきゃならん。九条君、たまにはテーブルについたらどうだ」

壁際のパイプ椅子でメモをとる外交官に、佐伯

がそう声をかけた。

外務省・総合外交政策局・安全保障政策課係長という長い肩書きをもつ九条寛は、この集まりの事務方トップで、部屋にいたことは滅多にない。普段は、専用の事務室に米國務省の担当者たちと詰めていた。

「いえ、しかし自分はこういう問題の専門ではありませんし、誰かが記録しないと」

「それは、係長の仕事なのか？」

「はい。役人はこれが仕事です」

「とにかく座れ。代表団長としての命令だ」

音無は室内に顔を向けると、カラオケ・セットとして使われるスピーカーを見上げた。部屋の天井付近に吊り下げられている。椅子を使ってそれを一つ降ろすと、ハーフパンツのポケットからアーミーナイフを取り出し、後ろのカバーを外す。

「あんた、いつもそんなもんを持ち歩いている

の?」

「まあ、性分ですな。武器にもサバイバルでも使える。ルーペとLEDライトもついていて、便利ですよ。ところで衛星携帯は何個持ってきた?」

それは九条に問いかけた。

「二台です。事務局用と、われわれ専用という形で」

「では、もしテロリストが衛星携帯を出せと言ってきたら、事務局用のものを差し出してくれ。残る一台をよこせ」

電源が切られていることを確認してから、衛星携帯をスピーカーの中に隠して元の位置に戻す。

「パソコンはどうしましょう」

「パソコンがないとメールのやりとりはできないのか」

「いえ、衛星携帯だけで可能です。それに、機密情報も入ってはいません。全てクラウドでのやり

とりで、常にクリーンな状態に保っているのです、盗まれても問題はありません。国有財産という点を除けばですが」

「ならいいだろう。敵がパソコンを出せと言ってきたら、少し渋ってみせろ」

音無は作業を終えると、部屋の絨毯に埃が落ちていないかを入念にチェックしてからテーブルについた。佐伯が問いかける。

「それで、何かから取りかかるんだ」

「まずは、バイオテロの脅威評価からでしょうな。敵は二正面作戦を目論んだが、それは事前に露呈して上海上陸はかなわなかった。問題は、ここでどんなウイルス、細菌を、どんな方法でばらまくつもりだったのか。おそらく客船を選んだのは、乗員乗客に感染させて、上陸した先の観光地で広げるつもりだったからでしょう。八〇〇人程が上海観光を予定していました。つまり、われわれも

すでに感染している可能性は高い」

「マスクはあったよね？」と佐伯が九条に聞いた。

「はい。こういう事態に備え、大量のN95マスクとアルコール除菌スプレーを持参しています。すぐに配布します」

「現役時代、NBCテロはそれなりに研究はした。手遅れだとは思いますが、マスクの類は気休めにはなるでしょう。問題は致死率がどのくらいかだが、COVID-19と同等か、少し高いくらいと考えていた方がいいでしょうな。なぜなら、あまりに致死率が高いと拡散しない。敵の目的は、中国全土に広めることのはずだ」

「矛盾しないか？ ウイルス拡散が目的なら、陸地に突っ込んででも誰かを上陸させようとするはずだ」

「それは謎です。自分も、それを最初に考えた。あつさりと接岸を諦めたのはなぜだろうと。船を

乗っ取るだけの兵隊と武器をもっていたのなら、あのまま下船し街に繰り出すことも可能だったはず。……ならまだ違うハプニングがあるかもしれないし、あるいは別働隊がすでに上陸して拡散しているのかもしれない」

ここで「彼らの目的は何ですか」と九条が聞いてきた。

「金が目的じゃないことは明らかだ。これだけの準備をして決行するには、それなりの資金がいるならば犯人は金銭には不自由はしていない。おそらく犯人は、中国に恥をかかせたいんじゃないのか？ 少なくとも、北京政府はそう受けとるだろうな。最悪の場合、この客船を沈没させて証拠隠滅という手立てはあるが、船が乗っ取られたという事実が外に拡散したら、それももうできない。犯人は、起こりうる全ての展開に備え行動している。これは、明らかに軍事作戦だ」

「船医として、日本人の感染症医が乗り込んでいます。何とか接触し、状況を伝えましょう」

「それで、作戦は？」と、佐伯が音無に聞いた。

「まずは、中国が下手な手出しをしてこないことを祈りましょう。目的や目的地が何であれ、中国はメンツのために、自力での解決を図るでしょうから。あとは情報収集ですな。陸軍出身の参加者も何名かいるし、現役軍人は何人も乗っている。国際部隊になるが、手数には事欠かない。敵の勢力と配置を見極め、反撃に備えましょう」

「症状が出る前に？ 俺は、なんだか熱っぽくなくなってきたよ……」

「なに、死ぬ時はみんな一緒です。これがCOVID-19みたいな感染症なら、生き残るのは外務省の若手だけだ」

テレビではCNNを流していたが、ずっと海上自衛隊機の撃墜を繰り返している。官邸も防衛省

もいい迷惑だと音無は思った。せめてもう半日は隠しておきたかったはずだ。その間で北京と手打ちを行い、中国大使館の「遺憾の意」の表明とタイムリングを合わせて公表すれば、世論もある程度コントロールできる。

しかしアメリカ様は、おそらく日本政府の了解を取らずに情報をリークし、日本の世論を煽ろうとしているのだろう。そこに込められた意図は明らかだ。

やがて、キャスターがフラッシュ・ニュースを伝えはじめた。上海で豪華客船のハイジャック事件が発生したという、続いて乗客がSNS上にアップしたと思われる写真が映る。

先ほどまで音無もバルコニーから眺めていた、停船を求める中国公船の写真だ。

これで、少なくとも中国は問答無用にこの船の撃沈はできなくなった。

海上自衛隊第一航空群・鹿屋基地——。

予定は無かったが、国旗降下の時刻前に国旗が半旗まで下げられた。

起こったことは悲劇だ。憤慨もしたが、墜落事故でも隊員は死ぬ。一機墜落すれば、一〇名を超える搭乗員が死ぬのだ。

鹿屋基地では幸い、長らくその悲劇は起こっていなかったが、事故はいつかは起こるものだ。

しかし今回は撃墜だ。それも、戦争をしているわけでもない相手による撃墜だ。

第一航空群司令の河畑由孝海将補は、憤懣やかたない表情で厚木基地内にある航空集団司令部との電話を置いた。もし自分が厚木にいたら、同居する米軍に殴り込んでやるのと思った。

元はといえば、この任務は米軍からの要請だっ

た。中国海軍の空母機動部隊の位置がつかめないので哨戒機をもう少し大陸寄りに飛ばしてくれ、という依頼が発端である。

危険ではあったが、味方の空自戦闘機が護衛についているため少なくとも中国軍の戦闘機から不意打ちを食らう心配はないと河畑も思っていた。

ところが、空母を守る前衛の軍艦から撃つてきた。距離があまりに近く、回避する時間的余裕はなかった。

撃墜から一時間も経たないうちに、中国大使館から外務省へ「これは誤射であり、遺憾の意を表明する。日本政府が今回の事故で誤った判断にいたらないことを望む」と陳謝してきた。

誤射のはずはない。しかし中国としても、偶発的な攻撃ではあったはずだ。犠牲は出たが、だからといってこれで日中開戦の火ぶたを切つていいことにはならない。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。